

人生を変える出会い

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2021-10-08 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 原田, 浩司 メールアドレス: 所属:
URL	https://tohoku-gakuin.repo.nii.ac.jp/records/24746

人生を変える出会い

大学宗教授任・文学部総合人文学科助教 原 田 浩 司

マタイによる福音書、第四章一八～二二節

18 イエスは、ガリラヤ湖このほとりを歩いておられたとき、二人ふたりの兄弟きょうだい、ペトロと呼ばれるシモンとその兄弟アンデレが、湖みずうみで網あみを打うっているのを御覧ごらんになった。彼らかれは漁師りょうしだった。19 イエスは、「わたしについて来きなさい。人間にんげんをとる漁師りょうしにしよう」と言いわれた。20 二人ふたりはすぐに網あみを捨てて従したがった。21 そこから進すすんで、別べつの二人ふたりの兄弟きょうだい、ゼベダイの子ヤコブとその兄弟きょうだいヨハネが、父親ちちおやのゼベダイと一緒いっしょに、舟ふねの中で網あみの手入れていをしているのを御覧ごらんになると、彼らかれをお呼よびになつた。22 この二人ふたりもすぐに、舟ふねと父親ちちおやとを残のこしてイエスに従したがった。

今日の聖書は、ペトロとアンデレの兄弟、ヤコブとヨハネの兄弟がはじめてイエス・キリストと出会ったという場面です。今日の聖書の箇所から「人生を変える出会い」ということをテーマに話をさせていただきます。

今日の聖書の箇所が登場した四人は、それぞれ「漁師」として暮らしていました。おそらく、先祖の代からずつと漁師をしてきた家系だろうと思います。また、漁師以外の生き方は考えていなかったのではないかと想像されます。来る日も来る日も、ガリラヤ湖に漁に出ては魚を獲り、そして獲った魚を売って生計を立てていた。それが今日の四人の普通の暮らしでした。しかし、この人たちが、イエス・キリストとの出会いを通して、彼らの生き方ががらりと変えられていく。今日の聖書の言葉は、そのような変化が起きた場面です。そういう劇的な場面なのですが、今日の聖書では、ごくさりりとしか記されていません。

さて、皆さんの多くは、東北学院大学に入ってはじめてキリスト教に出会ったという学生がほとんどだと思えます。わたしが皆さんに期待したいことは、四年という限られた大学生活ですが、この期間に、皆さんのこれからの人生の方向性に、何かしら決定的な意味を与えるような出会いを経験していただきたいということです。

個人的な話しになりますが、わたしは東北学院大学の卒業生です。ですから、皆さんの先輩に

なります。大学三年生の時、わたしにとつて人生を変える出会いを経験しました。わたしはこうして礼拝で聖書の話をし、キリスト教学の講義も担当しています。その当時、実は、一度も教会に行つたことのない、いわゆる「普通の」大学生でした。聖書の内容とかキリスト教が教えている内容には、どちらかと言えば、さほど興味がありませんでしたが、クリスチャンの生き方には、問題意識というか、関心を持っていました。わたしは大学に入学してから、二年生が終わるまでの二年間で、クリスチャンの作家である三浦綾子さんが書いた小説やエッセイなど、文庫本で発表されている作品を全て読破しました。ですので、心の片隅に、キリスト教について、多少の関心や問題意識がありました。大学三年生の夏のことですが、ひとり、自転車で十日間ほど、三浦綾子さんが小説の舞台で書いた場所を予めルートに入れながら、北海道を旅行しました。

わたしが大学に入学した春に、最初に読んだ三浦綾子さんの小説が『塩狩峠』でした。この小説に衝撃を受け、次へ、また次へ、という具合に、三浦綾子さんの小説を読み進めて行きました。ですから、旅行を計画した時、この小説の舞台となった塩狩峠を訪れたいと思つていたのですが、当時は、今のようなインターネットもありませんでしたし、本屋で売られている市販の北海道の地図を探しても見つけ出すことができませんでしたので、仙台を出発する時のルートに、残念な

がら塩狩峠を含めることができませんでした。旅行が思いのほか、ペースが遅くなってしまったため、最北端の稚内についてから、家路を急ぐために、急きよルートを変更しました。そして、稚内から旭川に向かうルートに変更し、自転車のペダルをこいでいた時、その土地の地名を示す看板が目飛び込んできました。「塩狩峠」でした。わたしはとても驚きました。その日は、本当に想定外のことが起こりました。しかし、それをも上回るの想定外のことがこの後起きました。いろいろ話したい経緯はありますが、結論だけを言いますと、わたしはこの日の夜、三浦綾子さん本人の自宅の玄関にいました。本当に全くの想定外でした。当時の三浦綾子さんはパーキンソン病が進行していて、既に絶筆状態でした。亡くなられる3年前のことです。

玄関での束の間の立ち話でしたが、三浦綾子さんと直接お会いし、お話しをしたのですが、別際にわたしに言った言葉は今も鮮明に覚えています。わたしがおいとまする最後に、こう言われました。「あなたはこれまで教会に行ったことがありますか?」。わたしは答えました。「いいえ、一度もありません」。すると「わたしが小説の中で書いてきたことはみな、教会で語られていることです。ですから、旅行から帰ったら、あなたも教会へ行ってみてください」。はい、わかりました。そう約束して、別れました。

わたしは北海道旅行から帰り、はじめてキリスト教会に足を運びました。それが大学三年の後期がはじまった九月のことです。それから、わたしの人生が変わりました。大学を卒業後、東京神学大学に編入学し、さらに四年間学び直し、卒業後に、六年半ほど、大阪でキリスト教会の牧師として働きました。東北学院大学で過ごした学生時代に、自分が描いていた人生ががらりと変わりました。わたしは自分が全く想定していなかった人生を、今まさに歩んでいます。三浦綾子さんとの出会いは、一つのきっかけとなりましたが、本当のところは、今日皆さんと読んだ聖書の箇所で、ペトロやアンデレたちがそうであったように、わたしは、三浦綾子さんとの出会いをきっかけにして教会と出会い、そして礼拝を通してイエス・キリストとの出会いがもたらされたからです。それによって、わたしの人生は変わったのだと思います。

大学ではこうして毎日、礼拝がおこなわれています。礼拝は、イエス・キリストとの出会いが出来事となる場です。ここにいる皆さんも、礼拝を通して、キリストとの出会いを体験していただきたい。それがわたしの願いです、そして、礼拝を通して、皆さんの学生生活がより豊かなものへと変えられていきますように。そして、皆さんの人生が、皆さんが思い描いている以上に、より豊かな、そしてより意義のあるものへと変えられていきますように。そのことを願っています。

祈り

主なる神さま。こうして東北学院大学との出会いが、学生一人ひとりにとって、自分の生き方、自分の人生を変えるようなイエス・キリストとの出会いとなりますように。そして、東北学院の礼拝が、イエス・キリストとの出会いをもたらし、みなさんの人生を変えていく、その場となりますように。この大震災で、様々な形で、今、人生が変わった人たちがわたしたちの周囲に大勢います。今そのような状況の中でも、こうして大学での学びの生活を続けることが許され、今それぞれにこの貴重な時が与えられていることを感謝いたします。今わたしたちが過ごしているこの時を、研鑽と、自己の心身の成長と向上のために、有意義に用いることができますよう、学生一人ひとりの生活をあなたが支え、導いてください。イエス・キリストの御名によって、祈り願います。アーメン。